

早稲田大学審査学位論文(博士)の要旨

博士（人間科学）学位論文 概要書

存在と構成

— 人間科学基礎論 —

1996年1月

早稲田大学大学院 人間科学研究科

圓岡偉男

指導教授 濱口晴彦

本稿は、経験科学としての人間科学の基礎づけに向けられたものである。本稿は第一章「関係と意味」、第二章「存在と体系」、第三章「観察と認知」の三章構成をとる。これらの章はそれぞれ、関係論、存在論、認識論に対応する。これらは、相互に関係しており、相互補完的關係にある。経験科学は経験対象の存在にその起源をもつ。経験科学は考察対象なしに成立し得ない。現実への考察が経験科学であるならば、現実とは如何なるものなのかがまず理解されねばならない。しかし、現実を考察対象とする経験科学にとって、その存立にかかわる考察対象に対して、その存在理解について多くの注意が払われることは少ない。本稿における存在と構成というテーマは、差異と関係との二つの視点から事実としての存在を再構成することにある。

19世紀の実証主義は観念から現実への転換であった。そこには確かに大きなパラダイムの転換があった。しかし、そこでは、現実への問いは自明的なものとして、隠蔽されてしまった。そこには、事実／観念という差異化があったのみである。われわれのこの試みはこの差異化へ新たな差異化をもたらすことになる。すなわち、「現実」というものへの意味付与の試みがそれである。経験科学が現実を学的営為の素材とする以上、これらのことを無視することはできないものである。そのような意味で本研究は事実を考察の対象とした学の基礎づけを目指した一つの試みであるといえる。

経験科学は現前する現象をその出発点とする。しかし、現前する現象とは如何なる性質を持っているのであるか。われわれは事実としての現象自身に対する根本的理解を欠いて真の理解は得られないと考える。現れ出たものへの考察が経験科学であるならば、現れ出るということは如何なることなのかが理解されねばならない。それは、現れ出たものへ、すなわち考察対象としての現象への理解をもたらすものである。ここで行われる考察は、認識の認識、存在の存在への考察に向けられたものである。したがって、でここで展開される体系はメタ理論として位置づけられる。

われわれは、認識を得るにあたり、意味を持ってその理解を得る。意味は常に何らかについての意味であり、そこには対象の存在が前提されている。対象は差

異化によってその存在を見る。それは外部の創出であり、自己あらざるものの存在によってのみ存在は規定される。そしてまた、その差異自身別の差異によって規定される。われわれは、このような差異を規定する差異を「意味」と呼ぶ。さらに、このような差異の差異をここではセカンドオーダーの差異と呼び、そして、それに先立つ差異をファーストオーダーの差異と呼ぶ。対象は差異によって構成され、さらに差異によって意味を得る。差異はあらゆる認識の始源であり、差異なくして何ら認識することはできない。意味とは常に構成された差異であり、常にセカンドオーダーの差異として構成される。意味は対象によって規定されるのではなく、対象のもつ関係化の可能性によって規定される。すなわち、セカンドオーダーの差異とは関係へ向けられた差異化として理解される。

差異化と対象規定という立場から存在を規定するならば、存在を差異の継続的産出にそれを見ることが出来る。差異の連続的確認のもとに存在を規定することが出来る。ここにおける差異の連続的産出とは、関係化の連続を意味する。すなわち、外部との関係化を保つ限りにおいて存在を提示できるということの意味する。関係とは一つの作用連鎖の中に成立する。関係とは特定の作用が遂行されることで成立している。この作用遂行が実現されないならば関係は消滅する。したがって、関係は常に時間のもとに理解されねばならないのである。時間のもとに存在は関係化の連続をもって成立している暫定的な差異化として理解できよう。

われわれの置かれている場としての世界は様々な要素を包含した複合体として構成されている。ここにおいて、その関係化の可能性は要素の数に対して多様な可能性の提示を見る。われわれが現前する現象とは、ここにある、関係化の可能性の実現に他ならない。しかし、諸要素を包含した世界において、可能性の実現は唯一のものではない。すなわち、現実とは数ある可能性の中から選択的に実現された可能性の一つに他ならないものとして理解できよう。そして、経験科学が対象とする現実はこのような差異化のもとに一つの理解が与えられる。われわれは差異化をもってのみ認識得ることが出来るのである。そして、本稿では、このような視点から人間科学へ向けた学的営為を基礎づけることを試みている。